



施設基本計画（骨子）

令和5年10月31日

施設基本計画の位置づけ

- 原則として、本施設が立地する敷地（浪江町川添地区）を対象とし、復興庁設置期間内（～令和12年度）を期間とする。
- ただし、F-REI施設全体の一体性や利便性も考慮し、適宜F-REI施設全体にも適用されるものとする。
- また施設は維持管理・運用期間においても、継続して使用し続けるので、令和12年度以降にも施設基本計画の考え方が引き継がれることが望まれる。

	R4 短期（概ね5年後）	R9 中期（概ね10年後）	R14 長期（概ね30年後）
浜通り地域	福島イノベーション・コースト構想		
	福島県総合計画（～R12）※		※いずれの計画も福島県全域が対象。
	福島県復興計画【第2期】（～R12）※		
	ふくしま創生総合戦略（～R6）※		
	ふたばランドデザイン（～2050（R32））		
浪江町	浪江町復興計画【第三次】（～R12）		
	浪江町総合戦略（第2期）（～R6）		
	復興整備計画（～R8）		
	浪江駅周辺整備計画・ランドデザイン（～R8）		
本施設	施設基本計画（～R12）		

施設基本計画（骨子）

1. はじめに

- ・ 経緯・背景
- ・ 施設基本計画の位置づけ

2. 施設の概要

- ・ 敷地面積
- ・ 敷地特性
- ・ 建物規模
- ・ 工期

3. 施設整備の方向性

- ・ 多様な研究内容への適応
- ・ 周辺環境や景観への配慮
- ・ 様々な方々への親しみやすさ

・ 安全性や快適性

・ 地球環境への配慮

・ サステナビリティ

資料 3

4. 研究開発環境の充実に資する施設整備に係る重点方針

総論

交流・連携

防災・減災

環境・サステナビリティ

資料 4

5. ゾーニング・配置計画

6. 動線計画

7. 設備インフラ計画

8. 主要諸室

9. 留意事項

- ・ まちづくり上の配慮
- ・ 外観デザイン・建物高さ
- ・ サイン計画

- ・ オープンスペース
- ・ ユニバーサルデザイン

- ・ 環境配慮への取組
- ・ ライフサイクルコストの低減

第1回・第2回会議における委員からの主な指摘ポイント

交流・連携

- ・施設だけを考えるのではなく、研究・教育活動、地域や企業との連携、それに関わる全ての方々の緊密な交流を支えるための環境を実現するためのキャンパス計画的なことも考えることが必要。 [第1回]
- ・研究者にとって、何らかの公共空間的な場が必要で、町のようなキャンパスになるとか、逆に町をキャンパスのように使うとか、全部お膳立てして造るのではない創造性があるとよい。 [第1回]
- ・大部屋は新しい研究をするために重要で、些細なことでも気軽に聞けるので、特に若い方々が研究をする上では非常に有効。 [第1回]
- ・人材交流や技術交流としては、オンラインだけではなく、対面で人が会うことが重要なので、この敷地が交流の観点や交通利便性の観点から地域の交通ネットワークの中でどのように位置づけられるのかという点も留意が必要。 [第1回]
- ・研究員だけでなく、スタッフや地域で支える方、将来それを担っていくような子供たち、観光等で来る方々がどのようにF-REIに関わるのか、広い目で一度俯瞰して見たほうがいいのではないか。 [第1回]
- ・地域との関係性等を考慮して、敷地周辺は比較的バッファを取り、少し緑地ゾーンの場所をつくって、町の人が遊びに来ても良いような場所とすることが必要。 [第2回]
- ・物理的に交流広場を作った場合、そこに行った人は交流するかもしれないが、日常生活の中で顔が見える場所にはならないので、いろいろな人々が自ずと通るストリート的なものを設けることも意識して配置を検討してほしい。 [第2回]
- ・米国の大学キャンパスではカフェテリアのような空間がキャンパス内のあちこちに分散していて、学生や教員が議論したり、異分野の先生方との交流の場となっている。そうした場が非常に重要なので、その点も踏まえて機能配置や施設のスペックを考えてほしい。 [第2回]
- ・5つの研究分野の配置に関して、5つの研究分野とそれを分野横断でまとめる交流空間の関係を早めに議論したほうがよい。それに応じて、エネルギーやインフラの供給方法や実験機材の搬入方法等、キャンパス全体を機能させる機能についても早めに方向性を見つけたほうがよい。 [第2回]
- ・敷地の東側を開く際、町の一部として捉えてもらえるような場所になっていくとよい。向かい側に町の公共施設があるので、それらと連続的に使えるような場所になるとよいのではないか。 [第2回]

第1回・第2回会議における委員からの指摘ポイント

防災・減災

- ・ 今求められる防災性能は、何があろうが使い続けられるということ。特に電気や水は、建築では何とも制御ができないので、災害が起きたときでも何とかできるように備えておくことが考えられてもいいのではないか。 [第1回]
- ・ 盛土をするなどしてF-REIの施設が水害でやられるというのは避けるべき。 [第1回]
- ・ 研究施設内はそれほど安全ではなく危ないところもあるので、洪水の際に一般の方の避難所として開放するか否かは、慎重に考えた方がよい。 [第2回]
- ・ 災害時に電気を止めてはいけないところや何かあっても守らないといけないところと、セキュリティレベルはほぼ一致するので、一体的に考えるとよい。 [第2回]
- ・ 洪水の場合は、突然水が上がってくることは基本的にはないので、一般の方に対して建物の屋上を提供するというよりは、逃げ遅れた研究者が命を落とさないようなスペースとして活用するという考えでよいのではないか。 [第2回]
- ・ 地盤の高さについては周辺の市街地との連続性や将来の拡張性等も含めて検討したほうがよい。 [第2回]

第1回・第2回会議における委員からの指摘ポイント

環境・サステナビリティ

- ・ 完成後も長く施設は残るので、持続可能に運営できるように、インフラのことや維持管理、生活者の環境ということにも思いを巡らせていくことが必要。 [第1回]
- ・ 研究施設は無機質で、ダクトやファンがたくさん見えているというプラント的な要素も拭えないが、そういったものをリジェネラティブ（環境再生型）でマイルドにしていくという視点はこれから必要。 [第1回]
- ・ 水素は合成燃料にも展開できるので、水素を基点にいろいろな考え方で需要と供給をうまくマッチングさせた次世代のキャンパス的な提案ができると夢や希望を持てるし、世界に発信できるキャンパスになっていくのではないか。 [第1回]
- ・ 建物のゼロエネルギー化を目指すとしても、エネルギーをしっかりと管理するという点は重要。施設完成後のマネジメントや管理の方法と施設の計画をリンクしていかないと継続性は確保できないので、運用をイメージしながら施設をつくっていくことを考えるべき。また、管理する人のスキルや、人為的なミスが起こらないための工夫が重要。 [第1回]
- ・ 建築物の存在感を薄めるために、農業用水を引き込んで水のせせらぎをつくるなど、自然と一体となった、ランドスケープと一体となったものをつくっていけるとよい。 [第2回]
- ・ 水素利用については、実験としてというよりは、ガス系の熱源機を水素に代替するなどして通常のエネルギー供給として一部利用しているという見せ方ができれば、視察者等へのアピールになる。 [第2回]